

正信偈讚仰(一)

細川 巖 述

「彼の阿弥陀仏の四十八願は衆生を摂受したまう」これを、他力の悲願はかくの如きの我がが為なりけりという。それを「疑い無く慮りなつかの願力の道に乗ず」という。

法の深信で、大事な所は何か。

それは、疑い無し、本願に疑いが無くなつて、そして慮り無し、それを彼の願力の道に乗ずという。乗彼願力という。この「疑無し」、大体ここまで人は早く到達するのである。私に本願がかけられておる。それはもう永年聞かして頂いているからだんだんわかってくる。本願があつて、南無阿弥陀仏があつて、撰取心光常照護、念仏衆生撰取不捨、そのこととは疑いがなくなる。

最後まで残るのは何か。それは慮りである。慮りなしというのが最後の問題。これを歎異抄第9章の問題という。唯円は言った。「念仏申し候えども踊躍歡喜の心疎かに候うこと、又いそぎ浄土へ参りたき心の候はぬは如何にと候べきことにて候うやらん」教えによつて念仏を教えられました。念仏申しています。念仏を申すものを救つてくださるといふ本願には私は、も早、疑いはありません。ただし、念仏は申しておりませんが喜びがありません。また急ぎ浄土に参つていこうという願生心が無い。勇んで仏法の話が聞こうという、そういう気持ちがありませんが、これは一体どうしたことか。ごさいましようか。「如何にと候うべきことにて候うやらん。」これを慮るといふ。こういうことでは、ひよつとしたら、もしかして、私は本物ではないのではなからうか。本願はよくわかつた。念仏申すものを助けて下さるといふ本願

に疑いはありません。が、こういう喜びの無さ、願心の無さ、不精進の、無慚無愧では、ひよつとしたら、もしかして助からないのではなからうか。ここが一番最後の問題。求道の最後の問題。それを仏智疑惑、如来無視というのである。それはあなたがあなたの心を慮つていけるのである。これではいけないとあなたがあなたの心を心配している。そこには、如来が無視されている。あなたが如来を無視しているのだ。赤ん坊がおつて、おしめを汚した。これではいけない。私が洗濯しなければならぬ。これは、親を無視しているのである。親がおつて、どんな不始末でも迎えてつてくれる、そういうことがわからない。だから自分で自分のおしめを赤ん坊がせんたくして、これをきれいにしなきゃいけないという所に、一番大きな罪がある。如来を無視しているという罪である。

それを誹謗正法という。それを誹謗法という。教えを誹るといふことは、悪口を言うことでは毛頭ない。悪口はいわぬが教えを無視している。仏をめぐらしにしている。仏をめぐらしにしている。これはこの事。何か悪いことをしている時に仏をめぐらしにしているというが、そういう事ではない。慮るのである。如来の本願を無視して自分で恰好をつけようとする所に誹謗正法の罪がある。それを慮るといふ。それが最後の問題。疑いは無い。しかし本當は疑つておる。われわれの心から言えば本願については、も早ようわかつた。しかし、これではいけないのではないか。と言うのが最後の問題である。それを二十願という。それを仏智疑惑と言うのである。仏を見ず、経法を聞かず、菩薩声聞聖衆を見ずというのである。自分の殻に閉じこもつておる。如来を無視して、自分の慮りの殻の中に入つて、もしかしたら、ひよつとして、これではいけないのではないか、心をきれいに

にしなければいけないのではないかと慮つておる。それを殻の中に入れておるといふ。心を閉じている。本當に教えを聞いていないのである。他力の悲願はかくの如きのわれらが為なりけりである。こういう疑深く慮りに満ちて最後までごちやごちや言うておる者。それが本當の私。南無阿弥陀仏と頭を下げて念仏申すこと、それを彼の願力の道に乗ずというのである。そこが、身に付いていることが大事で、それを正信という。信の最後の問題は無慮にある。慮りなしというところにある。聞思して遅慮することなかれというのは総序の最後の教えである。疑いなく慮りなし、全て如来に託した。



季刊

じねん

2017.10.1 中央仏教学院 通信教育同窓会 大分支部 NO.105

和讃 575

還相の仏との 出会ひや 日々新に

竹田市 吉岡 雄三

安楽浄土にいたるひと 五濁悪世にかへりては 釈迦牟尼仏の

利益衆生は

(浄土和讃20)

(意識) 安楽の浄土に往生して悟りを開いた人は、再びこの五濁の世にかえつてきて、お釈迦様と同じように限りない慈悲の心をもって私達を救つてくださいます。

この和讃は還相の仏・菩薩の救済のはたらきを述べたものです。「安楽浄土にいたるひと五濁悪世にかへりては」とありまます。お浄土のことを「安楽」とか「安養」とか言いますが、親鸞聖人は「光明無量」「寿命無量」と言われています。私達が最後に往かせていただく、「安らぎ」の世界です。阿弥陀様の世界です。そして「安楽浄土」にいたる人は、再びこの悪世に還つてくるといわれています。この「浄土往生」について、「教行信証」には「ついで、浄土真宗を案ずるに二種の回向あり。一つは往相、二つは還相なり」とあります。往相回向とは浄土に往くこと。環相回向とは、お浄土に往った人が再びこの世に還つてくること。浄土真宗では、お浄土に生まれることで

終わるのではなく、再びこの悪世に還つてきて、煩惱に苦しむ衆生を救うはたらきをするということとです。まずこのことを、はつきりさせておきたいと思ひます。さて「五濁悪世」以下ですが「阿弥陀経」に同じ趣旨の内容がありますので、その部分を引用してみます。「釈迦牟尼仏、よく娑婆国土の五濁悪世、劫濁(時代の乱れ)見濁(思想の乱れ)煩惱濁(煩惱の盛んなこと)衆生濁(衆生の資質がさがる)命濁(寿命が短くなる)のなかににおいて(中略)もろもろの衆生のために、この一切世間難信の法を説き給ふ」とあります。「難信の法」とは私達の常識をこえた非常に尊い法ということとす。この「阿弥陀経」をうけて「和讃」では、安楽浄土にいたつたひとは、この悪世にかえつて来て、お釈迦様と同じように衆生を救済していると述べています。これらの働きはすべて阿弥陀様のおはからいに

よるものです。ところで、「還相の仏」とはどういう方なのでしょう。私達は日々いろんな人と出会い、そして、いろんなことを学びます。「還相の仏」とは特別の方ではなく、私達の近くにいる人だと私は思っています。ですから日々の人との「出会い」を大切にしたいものです。



わかつても わからんでも 念仏しなさい

信国 淳

私は大谷専修学院で2年間学びました。学院長は信国 淳先生でありました。手を合わすことはできましたが、なかなか声に出して、ナムンダブツと念仏申すことはできなかったのです。職員になつてもそうでした。ところが、そういう問題を抱えて、悩んでいた時に信国先生

から教えられた言葉が「わかつても、わからんでも念仏しなさい。そして、念仏から教えられていきなさい。」という言葉で、理屈ぬきに念仏しなさいということとす。そして、また、私が念仏もうすようになったきっかけは朝の勤行のときに、となりに座つておられる信国先生がなんの構えもなく、に、いったら悪いのですが、本當に一人の老人が身なりもかまわずに、ナムンダブツと声に出して、念仏もうしておられる姿にふれたことがあったからです。そこで、念仏しておられる信国先生のまねをして、念仏していただくと思つたのです。それ以来、念仏申しているのですが、念仏から教えられたことは、私たちが、どういうものとしていきているのかということとす。ほんとうに身勝手に生きているなあということとす。 前帯広大谷短期大学長 中川 皓三郎

大見出しを入力します

小見出しを入力します



絵解き (キャプション)



絵解き (キャプション)

白抜き2行の
見出しです

白抜きの見出しです

この枠は2行
入力できます

この枠は2行
入力できます